

素材を核とした芸術教育支援プロジェクトの効果と課題

— 山梨における実践の検証から —

古屋 祥子（公立大学法人山梨県立大学） 林 聖香

キーワード：素材、廃材、造形美術教育、地域、アート、連環

はじめに

日本の保育・教育の現場において造形活動は、ほとんどの施設で実施されているという実態があり、子どもたちの成長における造形活動の効果や役割に関しても一定の理解がなされているかのように見える。しかし、現場での取り組みを実際に見てみると、その内容と質は様々であり、図画工作・美術に対して苦手意識を持つ人々を生み出していることもまた事実である。降旗（2016）は、子どもの年齢増に伴い、そういった苦手意識が増加傾向になる実態を示し、苦手意識の有無とその存在の度合いは、目指すべき造形美術教育との実質的な隔たりの距離を示すバロメータであると述べている。これまでに受けてきた造形美術教育から、負の感情を抱いたままになってしまった人々に対してアプローチしていくためには、目指すべき造形教育の本質を理解し、これまでとは違った造形活動の在り方を提案していくことで、隔たりの距離を縮めていくことが効果的であると考えられる。

本研究は、このような現在の日本の造形美術教育が抱える問題を背景に、山梨県内の芸術教育の活性化を目指し、素材を核とした芸術教育支援プロジェクトを考案・運営するものである。正解が決められた型どおりの造形活動ではなく、子どもの主体性

と自発性を大切にする「造形を通した人間教育」を支えるシステムとして、素材という物的な環境を提供すると共に、このような造形活動の在り方を浸透させ、苦手意識を持つ人の意識改革に繋げていく。

素材に着目する理由としては、現状の保育・教育現場で行われる造形活動の内容が、手順や出来映えを意識しすぎた作業的なものが少なくなく、使う素材の持つ物的な力や子どもと素材が対面したときに生じる様々な発見力を活用した活動が少ないと感じたからである。石井（2014）は、造形活動における提供素材による幼児の関心の違いについて、文部科学省「幼稚園教育要領」に記載された造形活動におけるねらいを達成するためには、素材をきっかけとした幼児の興味で創作ができる造形活動の設定を考える必要があると述べている。多様な素材を用意し、子どもが素材と対面して生じる様々な発見を大切にしながら表現につなげていくという素材の構成遊びを主とした活動スタイルを提唱することで、自分らしい表現が認められる学習空間の実現を促し、造形活動に苦手意識のある子どもや保育者の負担感の軽減を目指す。

本稿の目的は、4年間にわたる本プロジェクトの活動実態を明らかにすると共に、保育・教育現場、学生らの活動実践を通し

て、本プロジェクトの取り組みの効果を検証することである。さらに、利用者の造形活動に対する意識の変化とプロジェクトの運営に関する課題について考察し、より意義のあるプロジェクトへと成長させていくための手がかりとする。

1 「山梨県立大学リユース・アート・プロジェクト」の概要

まず本プロジェクトを立ち上げるにあたり、素材を中核にした芸術教育や制作の支援システムの先行事例の調査を行った。イタリアのレミダや岡山県のIDEA R LABⁱⁱの実践を参考に山梨県という地域の現状を見てみると、地域性の高い産業があり、なかには製品の製造過程で出る端材を有料で廃棄している業者もあるとわかった。ここで、図1のような、大学が中心となり、保育・教育現場と業者、さらには市民を繋ぐ、素材を核にした教育支援システムを考案した。この案が地域貢献の意義が大きいと判断され、大学内で特別予算を確保することとなり、2015年に「山梨県立大学リユース・アート・プロジェクト」を立ち上げた。以降2019年の今日まで多くの方々のご協力のもと、運営を継続しているⁱⁱⁱ。

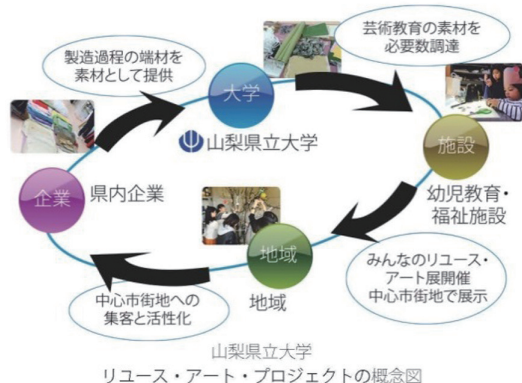


図1

プロジェクトの目的と概要は以下の通りである。

・目的

山梨県内の芸術教育の発展と福祉現場における芸術活動に本学が寄与すること。

・概要

山梨県内の企業が生産過程で出す端材などに表現活動の素材としての新たな価値を見出し、本学で集積して、教育機関や福祉施設に提供する取り組みである。和紙や水晶、ニット糸、絹織物など、良質の素材にふれ、感性を刺激することで創造性や表現力を育み、すべての人がその人らしく自己表現できることを目指す。

さらに、図2のように地域の人々の創造性や表現力が活かされる場づくりを理念に、次の4点の展開を目指す。①本学学生への教育 ②教育・福祉専門家の学びの支援 ③芸術活動へのサポート ④地域活性化を目指した県内企業との協働

以下、本章では、2015年度から2018年度の以後4年間にわたる本プロジェクトの活動実績について、取り組みの内容ごとに明らかにしていく。

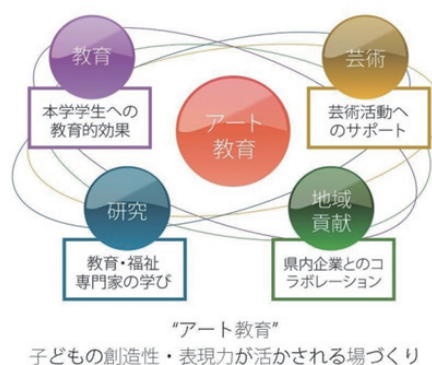


図2

(1) 素材の調達・整理・管理

初年度立ち上げ業務として、まず素材提供業者の調査を行ったが、プロジェクトの意義に賛同し、素材を提供してくれる企業

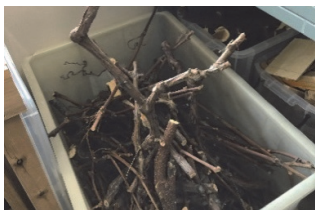


図3 大学内素材倉庫

や個人は多いことがわかった。次にニーズ調査として、私立幼稚園園長4名と私立幼稚園教諭2名に聞き取り調査を行い

「園では取り組める限界があるのでぜひ利

用したい」という声が聞けた。素材保管場所の確保に関しては、大学の倉庫一室を借り受けることができたため、素材の調達に乗り出し、地場産業品の端材など地域特有の高価なものを含む魅力的な素材が集まった(図3)。現在は約180種の素材が保管されている。集積された素材は以下のように分類される。

木材（山梨県産材）	板材、枝、白樺、竹、丸太、ぶどうの蔦（図4）  図4
紙	様々な形材質の和紙（図5、図6、図7）    図5 図6 図7
金属	様々な形状に加工されたもの（図8、図9）、金属くず   図8 図9
布・糸	ロール状布、はぎれ、不織布、ニット糸、毛糸
医療品	聴診器、綿棒、医療用メジャー、脱脂綿、ゴム手袋
自然物	まつぼっくり、蚕の繭（図10）、水晶（図11）   図10 図11
その他	ピアノ部品、タイル、バインド線、畳のへりなど

(2) 素材提供

素材は県内の団体に対して無償で提供することを決め、以下の利用条件とした。

- ・利用者は大学内の素材倉庫に素材を取りに来る（要予約）
- ・素材を活用した取り組みについて簡単な報告書を提出する

素材の提供先については、はじめは幼稚園、保育所などの幼児の施設が多かったが、障害のある子どもたちの団体やNPO法人、児童館、高齢者の福祉施設、専門学校にまで多様に拡大した。

(3) 利用者への実践アドバイス

使用者が素材を倉庫に取りに来る際に筆者が立ち合える場合は、素材の説明を子どもにすることや素材の観察の時間を活動の中に入れることなどをアドバイスし、より求められた場合には活動内容や進め方に対しても助言を行った。どのような素材を子どもが気に入り展開していくか予想がつかないことも多いので、素材は多めに持って行ってもらい、余ったら戻してもらおうというスタイルをとり、大切に循環していくことを理解してもらった。余った素材を倉庫に戻しに来る際には、利用者から活動内容や活動実施者として感じたことなどを聞くことができ、それに対する見解を伝える機会にもなった。

(4) レクチャー、ワークショップの実施

初年度は国内先駆者を招き、活動意義や今後の方針についてのレクチャーを開催して理解を深め、本事業で集積したリユース素材（以後、本プロジェクトで集積した多様な素材のことを「リユース素材」と呼ぶ）を使った制作体験では参加者の個性豊かな素晴らしい作品が生まれ、新たなアート教育の可能性とその成果を実感することができた。

また、利用者から素材の活用法についての問い合わせがあり、活用例を示すため、共同研究者がそれぞれの専門に則ってリユース素材を使った活動プログラム開発を行い、2016年度に活動記録集を発刊・配布した。活動プログラムでは、素材をよく観察してそこからの発見を創作に繋げていくことや、出来栄えよりも素材との対話の時間を大切にした、制作過程での学びの重要性を強調した。

その他、大学から素材と講師を派遣する出張型のワークショップも多く行っており、実施場所も美術館や盲学校、幼児教育センター、福祉施設など多岐にわたっている。

(5) みんなのリユース・アート展開催

2017年度に3日間にわたり開催した「みんなのリユース・アート展」(図12)は、プロジェクトの活動理念や立ち上げから3年間の取り組みの周知を目的に甲府の市街地でイベントを開催した。来場者の多さや滞在時間の長さから関心の高さがうかがえ、来場者アンケートからも満足度の高い企画となったことがわかった。メディアにより県内に広く報道されたことで活動内容や意義をPRすることができ、北杜市の美術館での巡回展開催にも繋がった。展覧会場の構成は以下3つのコーナーを設け、活動内容に対する理解が深まるよう工夫した。



図12 展覧会ポスター

① 作品展示

本事業で集積したリユース素材を使って作った作品を集めて展示。幼稚園や保

育所、福祉施設や学生など12団体が参加。

② 素材体験

素材棚を設置して多くのリユース素材に触れられるようにし、光の体験コーナーや来場者参加型の素材のオブジェ（木・布・紙の3種類）を設置（図13）。

③ 活動記録紹介

出来上がった作品だけを展示するのではなく、保育者が記録した子どもの活動の様子や作品解説を作品近くに置いたり、子どもたちの制作過程記録動画を見られ



図13 木のオブジェ

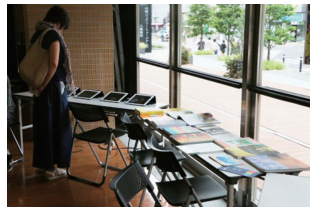


図14 活動記録紹介コーナー

るコーナーを設置したりして、創作の途中過程の大切さをアピールした（図14）。制作過程の記録があることにより、来場者からそれに関する質問を受ける場面が何度かあり、作品のみに焦点を当てるのではなく、出品者がどのような思いで制作に臨んでいたのか関心を持ってもらうことができた。制作における過程の重要性を改めて確認し、他者との交流を介すことで作品を振り返る良い機会となった。

(6) その他

周知PR活動としてHPの新設や学内展示スペースの確保と整備などにも力を入れた。2018年度には広報ポスターやチラシ兼活動報告書も発行した。活動報告書は、造形活動の内容を考えることに苦手意識を感じる保育者、教員に対して参考書のような役割を担うことができる。

また、造形活動だけではなく、舞台などの芸術表現に対しても素材を提供し、活用例として学生や保育者に提示することができた。

2 活動実績

本プロジェクトの利用者は、以下のように1次利用者と2次利用者の2つに分けることができる。1次利用者とは、リユース素材を用いた活動の企画・実践を行う者である。保育・教育現場で子どもたちに向けて活動を行う保育者や教員が主な利用者として挙げることが出来る。一方2次利用者とは、1次利用者が企画した活動に参加する者である。

1次利用者	2次利用者
・保育者・教員 ・NPO法人など（活動の企画者） ・学生	・乳幼児 ・小学生 ・親子 ・障がい者（成人、小学生） ・高齢者 ・学生 ・子育て支援者

本プロジェクトの1次利用者は、それぞれに子どもから高齢者まで幅広い2次利用者向けに、様々なスタイルの活動を実践的に行ってきた。これまでに行われた活動は以下の通りである。

対象者	活動名
乳幼児	・世界に一つだけの素敵な飾り (2015 年) ・素材体験～自然物で構成を楽しむ～ (2016 年) ・身体表現遊び―木とかくれんぼ&風になろう― (2016 年) ・影で遊んでみよう―森のようちえん 屋外での制作活動― (2017 年) ・おとロボット「おっくん」をつくろう (2017 年) ・木工工作を楽しもう！ (2017 年) ・みんなでノアの方舟をつくろう (2017 年) ・ひなまつりの制作～素材に触れる～ (2018 年) ・りすのペン立て (2018 年) ・大きな大きなオリジナルの葉っぱを作っちゃおう (2018 年) ・手や足を使って絵具遊び 大きな横長の紙に自然を表現 (2018 年) ・光るきのこをつくろう～和紙や糸でランプシェード作り～ (2018 年)
親子	・親子ふれあい科学あそび～リユース・アートを親子で楽しもう～ (2016、2017、2018 年) ・親子ふれあひあそび～リユース・アートを楽しもう～ (2018 年) ・ファミリーサポートしょうわ ミニ交流会【リユース・アートを楽しもう】 (2018 年) ・いろんな素材で遊ぼう (2018 年)
保育者・教員	・リユース・アート入門～素材で遊ぶ～ (2016、2017、2018 年)
小学生	・リユース・アートってなあに？ (2016 年)
障がい者	・2月のハッピーマカロン団「宇宙」をテーマに楽しもう (2017 年) ・盲学校連携ワークショップ「リユース素材を使用した楽器制作」 (2018 年)
高齢者	・高齢者福祉施設におけるリユース・アートプログラム (2016 年) ・〈介護予防相談会〉のワークショップ (2016 年) ・毛糸の帽子のマスコット (2017 年)
学生	・リユース倉庫 棚作り (2016 年) ・リユース・サロン 制作計画 (2016 年) ・リユースの花パサージュ展示 (2017 年) ・リユース・アート入門～素材で遊ぶ～ (2018 年) ・ジュエリーショーのためのジュエリーおよび衣装の制作 (2019 年) ・バンハッ大学冬季日本語研修 (2019 年)
一般	・リユース・アート レクチャー (2015 年) ・リユース・アート・ワークショップ (2015 年) ・さをり織りの体験 THE Six SENSE～医療福祉系リアル人生ゲーム～ (2016 年) ・みんなのリユース・アート展 (2017 年) ・みんなのリユース・アート巡回展 (2017 年)

3 活用実践事例を通した利用者からの反応

本稿はこれまでに行われてきた実践を検証し、プロジェクトの効果について考察していくことを目的にしているが、本章では利用者からの反応に着目し、利用者が本プロジェクトに参加して感じた意見や感想の中から、関連する記述を抽出していく。以下、1次利用者や2次利用者が異なる活動を事例として取り上げていく。

(1) 世界に一つだけの素敵な飾り

○ 活動実施内容

2015年、公立保育園年長クラスにおいて園児20名による卒園制作(図15)と



図15

として実施され、リユース素材を使った卒園プロジェクトと 作品

しては、素材提

供と活動の実施アドバイスをを行った。

まず、本事業で集積した様々なリユース素材を使って個別に構成遊びを繰り返した(図16)。納得がいく構成になったところで接着し個人作品ができ、さらにこれをみんなで話し合いながらレイアウトを決め、クラスでひとつの作品にまとめた。

○ 1次利用者の意見・感想^{iv}

・以前は保育者がテーマやモチーフを独断で決め(昔話のひとつのシーンを貼り絵で作る等)、出来上がりも保育者が予想したとおりに見栄えが良くなるよう作業準備や分担を設定



図16

リユース素材を鑑賞する子どもたち

していたが、子どもを主役にした活動で大きな作品が作れるのだと意識が変わった。

- ・大人がゴールを決めなくても子どもの力を信じていいのだとわかった。
- ・物を選び、並べるという作業だけの中に、こんなにも子どもそれぞれの個性が出るのだとわかった。
- ・自分自身で想像して作るからこそ味わえる気持ちや自信があり、それがあからこそ、友達の個性も受け入れられるのだと感じた。

(2) リユース・アート入門 ～素材で遊ぶ～

○ 活動実施内容

県の社会教育課が行う「子育て支援リーダー実力アップ講座」の講師として2時間のワークショップを筆者が企画・運営し、プロジェクトからは素材提供を行った。2017年度の参加者は保育者や児童館職員を含む子育て支援に興味がある方27名で、年齢も20～70代と幅が広がった。

はじめに参加者は素材倉庫へ行き、各自好きな素材を数種類選ぶ。その後、そ

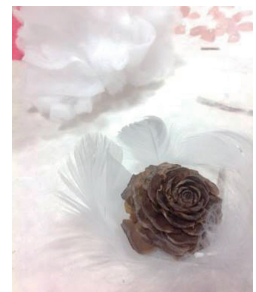


図17 参加者作品

の素材の観察を触ったり加工したり匂いを嗅いだりしながら行い、発見した特徴をメモにとる。これをもとに素材の面白い表情を探り、お互いが引き立つ組み合わせを考え構成した(図17)。これを写真に撮りタイトルを付け、写真作品を参加者全員で鑑賞する。

○ 2次利用者意見・感想^v

- ・時間を忘れ、制作に没頭し、楽しむことができました。子ども達にも体験させて

あげたい、そして、その感性の発見を共有したいとワクワクしてきました。

- ・捨てられてしまうものも芸術作品のように命を吹き込まれていく過程など、子どもに自由に発想させる良い材料になると思います。見方や考え方、思いつきで捨てられてしまうものが再び活用されるというのは、物を大事にする思考にも繋がると思います。
- ・リユース・アート、初めはできるかどうか不安でしたが、素材の特徴をメモにとったりすることで、素材の特徴を生かしたいと感じ、制作することができました。みんなの作品はそれぞれ個性的で、それぞれに違って素敵な作品ばかりで、素晴らしいなと思いました
- ・廃材を使った工作は普段からよく行うため、自分にとっては身近なものだと思っていたけれど、素材に注目したり、よく観察したりしてみると、こんな手触りだったのか！など、新発見もあった。
- ・「作る」ことばかりにとらわれず、見たり、触ったり、確かめたりということを大事にする活動も親子を対象として提案してみたいと感じた。

(3) その他の検証した活動

- ・親子ふれあい科学遊び～リユース・アートを親子で楽しもう～ (2016年)
- ・リユース・アートってなあに？ (2016年)
- ・ファミリーサポートしょうわ ミニ交流会【リユースアートを楽しもう】 (2018年)
- ・親子ふれあいあそび～リユース・アートを親子で楽しもう～ (2018年)
- ・ひなまつりの制作～素材に触れる～ (2018年)

○ 1次利用者の意見・感想^{vi}

- ・保護者の方にも素材の工夫が伝わっており、いろいろな素材を使って製作している様子を伝えることができた。
- ・クリスマスリースやジュースといった自由なテーマでつくってもらったが、なにかテーマを設定してつくるのもよいのではと思った。
- ・より抽象的なアート作品になるような活動でもよいと思った。
- ・様々な素材があり、どの年齢の子ども達がどのように使えるか、とても想像が膨らみました。
- ・製作物や遊びに活用できるよう、今後もたくさんの素材と触れ合う機会を設けていきたいと思います。
- ・ゴルフフリーの大切さを改めて感じた。参加した若い親たちが、この体験を心に残し、子どもとの時間の中で、これからも楽しんでいってもらえたらと思う。
- ・「自由に」といっても、子ども達は戸惑ってしまうかと思ったが、全く心配は要らずしっかりとそれぞれの作品作りに集中していて、思いもよらないようなアイデアに驚かされた。

(4) リユースの花パサージュ展示

○ 活動実施内容

みんなのリユース・アート展との関連展示として、保育者養成課程の大学生37名が公立施設



図18
リユースの花展示 (部分)

花をモチーフに制作した作品を展示した(図18)。県内各所から集められた「素材」に注目し、素材の調査や研究をしながら制作を行った(図19)。展示には作品だけで

はなく、素材研究の成果も公開し、19個のガラスケースにそれぞれの魅力を紹介した。

○ 2次利用者の意見・感想^{vii}

- ・自分で素材を触ったり切ったり擦ったり引っ張ったりと試行錯誤しながら制作を進めていくと、今まで完成された状態のものを通してでは気づけない特徴に気づくことや素材に対して新たな可能性を見出すことができた。
- ・作りたいもののために素材を選ぶのではなく、素材を活かしながら作品を作るという活動をして、その難しさを感じるとともに、その素材の特徴や活かし方を考えることができてとても面白かった。
- ・素材をよく見る、素材を楽しむということは作品を作り上げていくうえで大切なことで、またそうすることにより、より強いこだわりも生まれると思った。
- ・同じ素材でも使い方によって全然雰囲気が違うということが分かった。
- ・素材を見るだけじゃなくて、実際に自分の手で触れて確かめることによって、新たな発見もできたし作品のイメージも浮かびやすかった。
- ・もういないもの、使わないものとされてしまうかもしれない素材が、こんなに素敵なお品に変身させることができて、再利用できるのだということを改めて感じた。
- ・廃材で数多くの素晴らしい作品を作ることが可能であるということに気づき、アートの表現の自由さを学んだ。

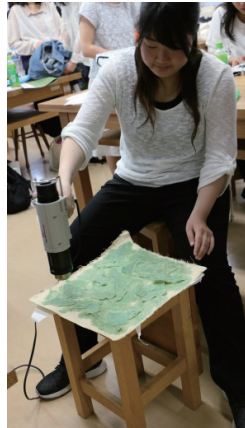


図19 制作する学生

- ・友達の作品も、制作しているときからの過程を知っているからこそ、素材の持つ良さの生かし方をたくさん学ぶことが出来た。
- ・それぞれの素材を選んで作った作品も各々の素材の特徴や良さが表れていて、ひとつひとつ細かく見ていくのがとても楽しかった。
- ・自分が使用した素材についてうまく説明することができなかったのも、よく調べるべきだった。

(5) ジュエリーショーのためのジュエリーおよび衣装の制作

○ 活動実施内容

山梨県立宝石美術専門学校文化祭のジュエリーショー（学生がデザイン、制作、演出、モデルのすべてを手掛けるイベント）のために、貴金属や宝石以外の素材研究についての授業



図20

ファッションショーを受けた7名の学生がリユース素材を使い制作・発表した（図20）。プロジェクトとしては、素材提供と共に、素材のルーツを説明し創作のイメージを膨らませるきっかけを作った。

○ 2次利用者の意見・感想^{viii}

- ・学生たちは、すでにジュエリーのデザイン画を描き上げており、それに合わせて選んでいたが、手に取って見る素材に触発されてアイデアが広がっていった。
- ・既存のジュエリーにはない発想で観客を魅了した。
- ・宝石・貴金属以外の様々な素材に触れて刺激的だった。

- ・素材を見て触って選べるところが素晴らしい。
- ・地場産業であるジュエリーに携わっているながら、県内の他の産業については知らないことばかりであることも分かった。県内の産業に興味を持つきっかけになった。

4 プロジェクトの効果についての考察

前章では利用者の反応に着目し、リユース素材との関わりの中で生まれた感想や意見を抽出した。これらをもとに、プロジェクトの効果について考察していく。

(1) 利用者の意識の変化

保育者・教員の立場で子どもたちに造形活動を提供する1次利用者は、本プロジェクトのリユース素材と新たに出会うことで、今後の活動に対して意欲的に考えを巡らせることができていた。造形活動の企画・実践に苦手意識を持つ保育者や教員が多くいる中、様々な素材との出会いや組み合わせを楽しむことで子どもたちの自由な発想を引出し、素材を主役にしたゴールフリーの活動の魅力を感じることができたのではないかと推察する。さらに、保育者・教員の固定概念的な造形活動観が、素材の力を借りることによりほぐされたということがわかる発言も多く、素材を観察し、その魅力を子どもたちと一緒に発見する、そこから展開していく面白さを楽しんだと考えられる。これにより、子どもの発見や発想を大切にしながら、自由度の高い表現を受け止める余裕が生まれ、保育者・教員自身もこうしなければいけないという意識を持たずに臨むことができるのではないだろうか。より柔軟に、子どもの主体性を尊重することが、保育者の負担や不安解消につながるのだという実感を持つことができた

と考察できる。また、活動に参加した2次利用者である子どもたちの保護者にも素材の工夫を伝えることが出来たという感想から、自身が行う活動に対する評価の面で不安を覚える保育者、教員らの達成感のようなものが感じられ、リユース素材が彼らの活動を盛り上げることの手助けになったのではないかと考察する。

実際に素材を選び、制作を体験した2次利用者である学生らは、リユース素材の多様さに関心を持ち、その意義について感じることができていたのではないかと推察できる。「リユースの花」に関わった学生らは、卒業後は保育者・教員として活躍する場合が多く、子どもたちにどのように素材を提供していくことが望ましいかを考えるきっかけとなっていた。彼ら自身が様々な素材に触れ、実際に見て触って、面白さを発見する時間を設けることで、今後子どもたちを前に活動していく際に、子どもたちの素材との関わりをゆったりと受け止める余裕を持つことが出来るようになることが期待できる。

一方で、テーマを設定するなど、活動を進めるうえで改善した方が良い点に気付くケースもあり、今後も素材の活用については更なる工夫が必要である。

(2) 地域との連環

今回のプロジェクトでは、普段の生活では顔を合わせる事のない人と人との交流の場を提供することができ、学生にとっては、地元企業の方や地域の方々と話をしたり協働したりする機会は少ないため、社会勉強の場となった。また、素材提供者に対しても、学生に対しても、地域全体で子どもを育てることへの意識を高める効果があり、また異業種の連環によって教育の内容に幅を持たせることができることも実感し

ていた。ジュエリー及び衣装の制作においてリユース素材を用いた専門学校生は、様々な異素材に触れ刺激を受け、県内産業に興味を持つ契機を得た。ものづくりに関わる学生らが県内企業や地域の産業に関心をもち、ものづくりを通じた地域理解や交流の機会となった。

システムの1次利用者と2次利用者は、素材を通して地域の産業や歴史を知る機会を得ており、リユース素材というモノを循環させるだけではなく、それに関わる文化や人を繋ぐ効果があることが分かった。本プロジェクトを活性化させ、関わる人を増やしていくことで、美術と教育と地域の連環をさらに充実させていくことに貢献出来るのではないかと期待できる。

5 プロジェクトの今後の課題

プロジェクトが拡大するにつれて、課題も多く浮上してきた。以下、カテゴリーに分けてまとめる。

(1) 倉庫の整理、管理コスト

集積する素材の選別や倉庫内の素材の管理・陳列に対する配慮が必要であることがわかり、倉庫の棚の整備やストックヤードとディスプレイヤードを分ける方法を試した。ディスプレイヤードは倉庫入口の正面に設け、利用者が入って最初に目にできるようにしたが、素材が増えていくにつれディスプレイヤードの容量も徐々に空気がなくなっている。所狭しとただ素材を並べるのではなく、ある程度の余裕を持って陳列のデザインを考えることで、利用者が倉庫を訪れること自体に楽しさを感じられるようになったり、新しい活動のアイデアを生み出すきっかけとなったりすることが期待できる。そのためには素材をもらうことが出来る場所という機能だけでなく、

利用者が造形活動や素材に対する考えをアップデートできるような場所にしていくことが求められる。現在は本学の倉庫の一室を借りて、その中で素材の管理ができていたが、今後プロジェクトをさらに盛り上げ、運営していくためには、広さや設備に配慮した新たな場所での展開も視野に入れていくことができると良い。また、集積された素材の管理方法に関しても今後見直していく必要がある。素材の種類が豊富であるからこそうまく循環させ活用していきたいが、在庫数の把握や素材の仕分けには日々継続的にそれを行うことのできるスタッフが必要である。そして、関わるスタッフ全員にとって理解しやすく、操作しやすいマニュアル作りも必要である。

(2) 素材の提供法

様々なジャンルでの利用者の拡大はプロジェクトが発展していくために必要なことであるが、利用者が増えていることで、素材提供の際のルール作りも強化していく必要性を改めて感じる。様々な人が倉庫に入りすることでプロジェクトに動きが生まれるが、素材提供の動きや現在提供中の素材の周知を効果的にコントロールしていくシステムがなければ運営は難しい。

(3) 利用者へのアドバイスの必要性

倉庫にストックしてある素材は、一目見ただけではどんなものから出来ているのか、どんなものに使われていたものなのかが分からないものが多く存在するため、利用者が素材について正確に理解するのは難しい。本プロジェクトは、地域活性化を目指した県内企業との協働も目指していることから、保育現場と県内企業の交流、循環を生み出すことも目的の一つである。その目的を達成するためには、プロジェクトの運営者が素材について理解し、利用者に向

けて正しく説明できることが求められる。しかし、筆者が素材提供に立ち会うことができない場合、十分な説明が出来ずに提供することになってしまい、後に活動報告を見てみると、誤った素材理解のまま活動を終えている事例もあるのが現状である。このような現状を生み出さないためには運営スタッフの在り方について改善が求められ、素材に対する研修やスタッフ全体でディスカッションする機会を設ける必要がある。

(4) 周知・活性化を目指したHP等の活用法

現在、HPでは提供できる素材の在庫情報を写真付きで公開したり、リユース素材を使って制作した作品の写真を掲載したりしているが、更新作業の滞りがある。また、どれくらいの人がHPを利用しているのか、アクセス数の実態把握ができるようシステムを改善する必要がある、この結果をもとに、HP運営の必要性や発信の方法について検討していくことが求められる。

おわりに

システムの立ち上げや運営、現場への還元方法も少しずつ手探りで試みてきたが、利用者の利用後の意見からは、美術教育に関する考え方の変化が窺えた。このことから、保育者・教員・学生らに造形活動の自由度に対する意識を開拓する作用があったと考えることができる。

しかし、このシステムの利用者数は増えてはいるものの未だ多くはないため、山梨県の芸術教育現場全体に影響を与えているとは言い難い。このシステムを継続し、活動の認知度を高め、更なる普及に取り組むことが必要である。HPやポスターなどを積極的に更新していき、動きや流れを感じられる活動としていくことでプロジェク

トを活気づけていくことが求められるが、スタッフの養成や予算の確保が課題として挙げられ、多くの仕事を分担し、スムーズに運営するためのシステム構築について考えていかななくてはならない。

今回は本プロジェクトの1次利用者や2次利用者の意見・感想より考察を行い、保育者・教員・学生の事例を扱った。しかし、本プロジェクトの利用者には障害がある方を対象とした活動を行う法人や、高齢者を対象とした活動を行う団体も存在するため、今後は様々な場面における成果の検証を行いたい。またこれらの結果を踏まえて、利用者の幅を広げ、より地域に根差したプロジェクトに発展させていきたい。

最後に、今後の活動の意義について考える。「美術嫌い」や「苦手意識」を多く生み出してしまっている日本の美術教育の問題が指摘される中、美術に対して負の意識を持った人々が美術の面白さや教育的な効果を理解せずに子どもと接することは、負の連鎖を生みかねない。このような日本の状況下では本プロジェクトのような試みは、負の連鎖を断ち切るという大きな役割につながる可能性があると考えられる。

i レミダ (REMIDA) とは、イタリアのレッジョ・エミリア市を拠点に世界14箇所に開設されているクリエイティブ・リサイクリングセンター。街の企業などから排出される端材や廃材の中から、アートの素材となるものを集積・ディスプレイし、教育現場や表現者、その他の市民に提供する機能の他、アトリエリスタ (芸術専門家) による素材の使い方や活動についてのアドバイス提供や集積した素材を活用したワークショップの開催、レミダデーと呼ばれる毎年恒例のイベント運営するなど、地域色

豊かな素材の循環により文化的で教育的な芸術表現を支えている。

ii アイデア アール ラボ (IDEA R LAB) とは、日本で初めて開設したクリエイティブリユースの情報プラットフォームで、作業スペースや共同キッチン、滞在スペースもあり、ワークショップなどを行う場として活用されている。また、近隣にはマテリアルライブラリーもあり、多くの種類の廃材が収集・分類・整理・ストックされている。その活動は、廃材に新たな価値を見出し循環させるとともに、地域性を生かしながら、人と人との繋がりが生じているところが特徴的である。

iii 2015年度山梨県立大学学長プロジェクトに採択。共同研究者以下10名。野牧子(代表者)、古屋祥子、鳥居美佳子、多田幸子、池田充裕、村木洋子、田中謙、大塚ゆかり、山中達也、大津雅之。2016年度山梨県立大学学長プロジェクト採択時は共同研究者として中島朱美、青柳暁子、高木寛之、伊藤健次の4名が加わり、2017年度には里見達也が加わった。2018年度以降は山梨県立大学人間福祉学部から支援を受けている。

iv 提出された活動記録と聞き取り調査内容から抜粋

v 第5回子育て支援リーダー実力アップ講座 振り返りアンケート結果より抜粋

v 学生振り返りレポートより抜粋

vi 提出された各活動記録より抜粋

viii 提出された各活動記録より抜粋

引用・参考文献・URL

・降籙孝 「図画工作・美術への〔苦手意識〕の実態と解消のための要素 ―目指すべき造形美術教育の教育コンテンツ開発に向けて―」 1 大学美術教育学会「美術教育

学研究」第48号369?376 2016年

・石井健 「造形活動における提供素材による幼児の関心の違いについて ―4歳児の構成遊びより―」 駒沢女子短期大学 研究紀要 第47号 p. 67?74 2014年

・REGGIO CHILDREN 『レッジョ・エミリア市自治体の幼児学校と乳児保育所の指針』2014年

・REGGIO CHILDREN 『CHILDREN, ART, ARTIST』2014年

・佐藤学監修『驚くべき学びの世界』株式会社ACCESS 2011年

・石井希代子「人を育て文化や町を創る市民参加型イベント『レミダデー』と『レッジョナラ』」 発達156 43-41 ミネルヴァ書房 2018年

・大月ヒロ子『クリエイティブリユース』millegraph 2013年

・レッジョ・チルドレン <https://www.reggiochildren.it/atelier/remida/?lang=en> (参照2019. 8. 31)

・REMIDA <https://remida.reggiochildrenfoundation.org/?lang=en> (参照2019. 8. 31)

・IDEA R LAB

<http://www.idea-r-lab.jp/?p=6039> (参照2019. 9. 1)

謝辞

本プロジェクトのリーダーである山梨県立大学の高野牧子教授をはじめ、共同研究者の先生方、本プロジェクトにご協力いただいた企業の方々、利用者の皆様に心より感謝申し上げます。

The effect and problem of an art education support project centered on materials

— From inspection of the practice at Yamanashi —

Shoko Furuya (Yamanashi prefectural university) , Seika Hayashi

Abstract

This research is an educational support project based on real materials that was devised and operated with the aim of improving the problem of art education in the current daycare and education field in Japan. Based on practical examples in Italy, the authors launched a “Reuse Art Project” in 2015 , have been provide an environment for formative activities through the meanings and feelings of materials to children and childcare persons who are not good at artistic activities, and have been promoting to reduce the burden for those people. The method is to utilize attractive materials (reuse materials) collected from the region, and to enjoy the discovery and excitement facing the materials for not only the children but also the teachers, and to lead to artistic expressions. By disseminating this method, we aim to make the instructors and teachers themselves understand the fun and spread of formative activities, and to instill artistic activities that respect children's spontaneity.

The purpose of this paper is to clarify the actual activities of this project over the past 4 years, and to verify the effects of this project's activities through childcare / education sites and students practices. In addition, we will consider issues related to changes of awareness to artistic activities in users, and problems related to project management, and provide clues for growing them into more meaningful projects.